

大学で教える／大学で研究する：自分と学生を応援する

田中 直子（高校 32 期、1980 年 3 月卒業）

大妻女子大学家政学部食物学科 教授

お茶の水女子大学理学部卒／大学院理学研究科修了



【現在の職業】

家政学部食物学科で教授をしています。大学教授というどんなイメージでしょうか？ 大学で教えてくれる人？ 大学で研究をしている人？ 時々テレビでコメントする人？

大学の教員の仕事は大きく分けると 4 つあります。教育、研究、大学運営に関わる仕事、社会貢献の 4 つです。**教育**：私たちは、講義をし、卒業論文や、大学院の修士論文や博士論文の指導をすることを通して教育をしています。その他にも就職活動の支援や、様々な資格取得支援（教員免許、栄養士・管理栄養士免許など）なども教育の仕事に含まれます。**研究**：卒業論文や大学院の論文作成を通して、学生と一緒に取り組みます。研究成果は学会で発表し、論文としても発表します。ここまでは何となくイメージできますか？ 研究のもう 1 つ大切な仕事として、研究費をゲットするというものがあります。「こんな研究をしてこんな成果がある予定なので、ぜひ研究費をください」という申請書を書いて応募します。大学からも研究費はもらえるのですが、それでは足りないのです。研究費が当たらないと辛い 1 年になります。**大学運営に関わる仕事**：入試問題の作成や入試面接、カリキュラム作成や時間割の調整、大学の広報活動（オープンキャンパスや大学案内の作成など）などは大学運営に関わる仕事になります。講義の合間に会議がたくさんあります。**社会貢献**：テレビに出てコメントしたりするのはこのカテゴリーに入ります。その他にも学会を開催したり、地域の人たち向けに公開講座をしたり、地域の小中学校に出前授業をしたり、それぞれの個性を発揮していろいろな社会貢献をします。投稿論文を審査する仕事などもあります。

こう書いて来ると、本当に幅広くいろいろなことをしなければならない仕事だなと私自身も思います。副業をすることを「2 足のわらじを履く」と言いますが、いつも 4 足のわらじを履いているような感じです。これらの仕事をどのようなバランスでしていくか最終的に日々決めていくのは自分自身なので、マネジメント能力も必要になります。

【どんな人が大学人に向いている？】

大学教授も人間なので、何もかもに高い能力を持っているわけではありません。私自身も高校時代から相変わらずのおっちょこちょいですし、タイムマネージングが下手でいつもべ切に追われていますし、いつも自分の能力の限界に悩んでいます。ではどんな人が大学での教授職に向いているのでしょうか？ 研究と教育は大切なので、その両方に情熱を持った人が良いですね。自分が興味を持ったことを人に語るのが好きな人、人が興味を持ったことを応援できる人が向いていると思います。いろいろなことを 1 人でやらなければならない仕事ですが、何かに寝食を忘れて没頭してしまうタイプも意外と向いていると思います。研究と教育のバランスは大学や学部によって異なります。自分に

あったところを模索していく必要があります。大学で教育研究職を得るためには期限のある職をいくつか渡り歩くことになるので、新しい環境に移ることをあまりストレスに感じない人が良いと思います。

【大学での学び】

私は理学部化学科で生体分子や代謝の化学を学び、もう少し体全体のことが知りたいと思って医学部に就職しました。逆の順番は？逆も不可能ではないと思いますが難しかったかなと思います。理学部ではすべての学問の基礎になる色のつかない学問を学ぶと考とえられているので、理学部卒という肩書きは医学部や薬学部、工学部、農学部などでも受け入れてもらいやすいです。

今は実学（実際に役にたつところまでを学ぶ学問）が人気ようです。資格の取れる医学部や薬学部も人気ですね。私の勤めている食物学科も管理栄養士・栄養士の資格を取ることできるので人気があります。このような学部では、理学部で学ぶような基礎となる科目を低学年で学んで、その上で専門科目を学ぶので両方勉強できるというお得感もあると思います。食物学科の学生を見ていて、資格があると転職が楽だなどしみじみと感じます。管理栄養士・栄養士の資格を重視してくれる仕事はけっこう幅広いのです。資格を使わないで仕事をしていた期間でもその経験が資格の上に経歴として積み重なっているように見えるメリットもあります。

一方で、資格が取得できる場合はその職業につくための実践教育が課されます。学年が上がるに従って実践教育が重視され、自由な発想の学問は傍に追いやられてしまう傾向にあります。私は理学部で、「学問」の上に自由に寝っ転がる贅沢な時間を過ごせたと今しみじみと思います。研究に携わりたいと思う人には理学部オススメです。

【高校生活】

自分がどのくらいできるのか限界を試すことは若い頃でないとなかなかできません。どんなことでも良いので、自分の限界に挑戦してみたいと思います（体は大切にしたいですが）。何か決断をするとき、「自分にできそうかどうか」無意識に考えます。自分が「できた」経験つまり「成功体験」の積み重ねが将来の行動に影響を与えていきます。若いうちにいろいろな「できた」を積み重ねていってください。

【自分自身を応援し続けること】

30代半ば頃、自分にできないことばかりが心に刺さって自信を失い、次の道に足を踏み出せずにいた頃、とある先輩が言いました。「自分を一番応援してくれる／できる人は自分自身だよ」と。人を励ますとき、人の良いところを探してアドバイスしたり、何かできたとき「できたね」と言ったりするけれど、自分自身にそうやって1つ1つ寄り添うのはなかなか難しいです。自分を客観的に見て、良いところを自分で応援するという視点ももらいました。「自分の良いところを生かす」選択を心がけるようになったかもしれません。

教員は学生を応援するのが仕事ですが、自分のことも応援し続けることが大切です。一方で、自分を応援し続けるためのヒントはいつも学生からもらっていると感じます。みなさんの人生で良い時

も悪い時もあると思いますが、自分を大切に応援し続けて行って欲しいと思います。そのためのヒントは、きっとみなさんの身近なところに転がっていると思います。